

# 2

## 災害対応力を育てる – 取り組み事例紹介 –

### (3) 気象庁(大雨)ワークショップの活用

---

---

CERDでは2016年度から地域の防災力向上を目指して、大阪市立大学の学生、連携する大阪市南部6区内の地域住民を対象に防災士養成講座を開催しています。2018年度は、そのカリキュラムの中に新たに演習を取り入れ、気象庁作成のワークショップ「経験したことのない大雨 その時どうする?」を実施しました。

気象災害にはさまざまなものがあります。中でも大雨による災害は、地形や建物をはじめとする周辺環境、あるいは家族に高齢者や身体の不自由な方がいるなどの状況により、身を守るために必要な安全行動に違いがあります。

災害から身をまもるためには、防災気象情報を有効に活用することが重要であり、気象災害を防止・軽減するための警報や気象情報などは気象庁が発表しています。大雨や強風などによって災害がおこるおそれのあるときは「注意報」、重大な災害がおこるおそれのあるときは「警報」、さらに重大な災害が起こるおそれが著しく大きいときには「特別警報」が出され、注意や警戒を呼びかけることになっています。ただし、「特別警報が発表されていない」ことは、「災害が発生しない」ことでは決してありません。各種の防災情報を体系的に理解して入手し、早めの準備、安全行動をとることが大切です。

一人一人が防災意識を高め、適切に防災情報を活用して実際の行動につなげられるよう、自らの問題として日頃からの備えや安全行動を事前にシミュレートすることが今回のワークショップの目的です。

#### 1. レクチャー

最初にグループワークで取り組む豪雨に関するシミュレーションのためのレクチャーを参加者全員で受けました。防災士資格をもつファシリテーターが進行をつとめ、実際の豪雨の映像を見た後に専門家としてCERD研究員から解説があります。

大雨災害から身を守るためのポイントとして、「地域の災害リスクを知る」、「災害から身を守るための知識を持つ」の2つの視点からのレクチャーとなっています。シミュレーションのヒントや、自分たちの地域の防災にも役立つ内容で、参加者はメモを取りながら熱心に聞いていました。

最後には質問タイムが設けられ、今年は台風21号による被害を受けたこともあり、活発な質疑応答、意見交換が行われていました。

## 2. アイスブレイク

グループワークのための班分けに際しては、参加者に打ち解けた雰囲気の中で積極的に取り組んでもらえるようアイスブレイクを取り入れています。まず、自分では確認できない背中に数種類の色のシールをスタッフが貼り付けていき、周りの人とコミュニケーションしながら、同じ色の人たちに集まってもらう方式を取りました。さ



らに、今回は参加人数が多かったため、同じ色のグループの中で、それぞれの誕生日順に並んでもらい、早い月生まれの人から半分が1グループ(6~7人)となるようにしました。

カラーシールによるグループ分けでは、多くの参加者とのコミュニケーションが活発に行われ、場の雰囲気が和やかになり、次に誕生日を教えあうことで、一緒に作業をする人たちとの一体感が生まれ、グループワークでもそれぞれが意見を言いやすい場づくりができます。

## 3. グループワーク

アイスブレイクで別れたグループごとにテーブルについてもらい、自己紹介からグループワークが始まります。今回のグループワークでは、それぞれが積極的に関わられるよう役割分担(リーダー、記録係、発表係、くじ引き係)も決めました。

### 1) 各グループのシミュレーションの条件

グループワークでは架空のまちに大雨が降り、気象情報が発令される中での行動をシミュレーションします。まずはくじ引き係がそれぞれ場所、住居、家族のくじを引いて、その組み合わせで条件が決まります。

場所については「川のそば」と「斜面のそば」の2種類、住宅は戸建てと集合住宅、階層、構造などをさまざまに組み合わせた6種類、家族も構成人数と性別・年齢、身体状況、車の有無などを組み合わせた6種類を用意し、各グループが違う条件になるよう工夫しています。

### 2) 大雨注意報・洪水注意報発令

最初に、台風が接近する中で大雨注意報と洪水注意報が発令された場合のシミュレーションを行いました。天気図に基づいた気象情報の詳しい解説や、注意報が発令されメールで配信された情報を確認していること、避難所がまだ開設されていない状況であることなども説明されました。

そうした状況をふまえて、配布資料を参考に災害に備えてどのように準備するのかを話し合います。歩行が困難な家族がいる場合や川のそばに住宅がある場合など、危険性が大きいと判断されるグループはこの段階でも避難を想定している様子が見られました。

### 3) 大雨警報・洪水警報発令と土砂災害警戒情報・大雨特別警報発令

次に、強い雨が降り続き、大雨警報と洪水警報、さらに雨が激しくなり土砂災害警戒情報と大雨特別警報が発令された場合についてのシミュレーションです。注意報のときと同じように気象情報や情報の入手について説明があり、その後、グループで警報発令後の24時間で、いつ、どのように行動するかを話し合いました。

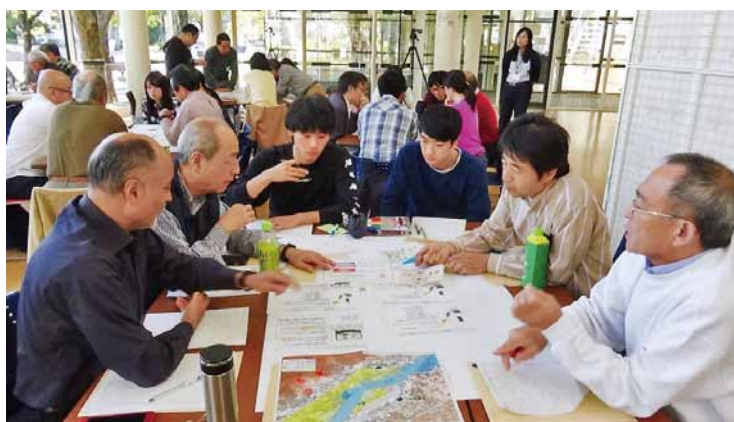
話し合いでは、それぞれが意見をふせんに記入したものをみんなで検討して、意見をまとめていきます。警報が発令された状況ということで、注意報のときよりもさらに積極的に意見を出し合い、今回のワークショップでは指定のなかった福祉避難所についての質問が出るなど、参加者それぞれが与えられた条件の視点から真剣に取り組んでいました。

### 4) 災害発生

最後に、実は警報発令直後に災害が発生していたという状況でのシミュレーションを行いました。発令されている気象情報は先ほどと同じですが、水路や川が氾濫し、がけ崩れが起こっているという状況です。

入手している気象情報は同じですが、実際に身の回りで災害が確認できたとき、どのように対応を変えるべきなのかを話し合いました。家族の年齢、身体状況などで避難行動に困難が予想される場合や川のそばの低層住宅、がけのそばなどに住んでいる場合には災害が発生していなくても早期避難を決断していたグループもあり、先ほどのシミュレーションと行動に違いが出ないといったケースも見られました。

このワークショップのプログラムは、開催する地域に合わせられるよう、本州・四国・九州版、北海道版、沖縄版が用意されていて、本州・四国・九州版には英語版もあります。今回は大阪での開催ということで、本州・四国・九州版を使用しましたが、大雨災害の発生日時、くじ引きの内容などは自由に変更することができますので、参加者の特性に合わせた内容で実施することができます。



今回のワークショップでも、それぞれのグループの条件に加えて、自分や家族、住んでいる地域に引き寄せて考えることもできていました。具体的な気象情報に基づいてのシミュレーションで、より防災意識が高まり、今後の行動につながることを期待されます。

## 4. 発表

グループワークで制作したシートを掲示して、発表前の休憩時間中に参加者がそれぞれ一通り確認した後に成果発表をしました。

グループワークの最初に決めた発表係がシートの内容に沿って、与えられた条件でどのようにシミュレーション

を行ったかを発表しました。他のグループの発表を聞くことで、住んでいる場所と住居の形態、家族構成によって異なる考えや共通する事項を確認することができ、自分のグループとは違う条件での避難についても考えられるようになります。

発表後には専門家から今回のワークショップ、発表に対する講評と、総まとめ

として大雨時の避難について早期避難、垂直避難などの原則や、災害への心構えについて解説がありました。

終了後もしばらくはファシリテーターと専門家がその場に残って参加者の質問に答えたり、参加者同士で意見交換をする姿も多く、具体的な条件の中でのシミュレーションがとても参考になったとの意見が聞かれました。



※今回実施したワークショップについては、下記のサイトで必要な資料、データなどを入手できます。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/knownow/jma-ws/>